

テーマ・レーマ構造と文アクセント

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 幸田, 薫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008500

テーマ・レーマ構造と文アクセント

幸 田 薫

0. 問題設定

一定の文脈で「正しく」発せられた文にはこの文脈と係わりなく備わっている統語的分節（各統語類への分節）と意味的分節（深層格ないし各論理項への分節）のほかに、この文脈との係わりにおいて初めて生ずる文脈的分節が認められる。⁽¹⁾このような文脈的分節として、Thema-Rhema, Topik-Komment, Fokus-Präsupposition, Topik-Fokus などの名称の下に諸家によって、さまざまな分節の型が提案されているが、本稿では用語上の混乱を避けるため、これらの分節の型を一括してテーマ・レーマ構造と呼び、それぞれの型は分節の基準となっている具体的な概念によって呼ぶことにする。すると、従来提案されているテーマ・レーマ構造は、2つの形式的定義によるものと、4つの内容的定義によるものに整理できるだろう。⁽²⁾（〔 〕内に分節の基準に基づいた名称を挙げる。）

イ. 形式的定義

1. 語順上、文頭第1位に置かれた要素とそれ以外の部分への分節〔文頭・文頭外構造〕
2. 文頭第1位に置かれた要素と文の第1アクセントを持つ要素（およびそれ以外の部分）への分節〔文頭・文アクセント構造〕

1, 2は、その内容的規定として3~6のいずれかが対応させられているのが現状であるので、内容的定義を提示したあとでまとめて問題にすることにしたい。

ロ. 内容的定義

3. それについて述べられている主題部分と、主題部分について述べている部分への分節〔主題・解題構造〕
4. 言語的文脈（および場面）から既知の部分と、未知の部分への分節〔既知・未知構造〕
5. 聴者が前提としている（と話者が思っている）情報を述べる部分と、聴者にとって新しい（と話者が思っている）情報を表わす部分への分節〔旧情報・新情報構造〕

6. 伝達価値が最も低い要素と、最も高い要素（およびその中間段階の要素）への分節〔伝達価値構造〕

3～6を表示する言語的手段（sprachliche Ausdrucksmittel）は各言語によって異なっているが、ドイツ語では——変形生成論の用語を用いて言えば——冠詞選択，代名詞化，特定の不変化詞の語彙挿入，文アクセント付与，語順変更規則，特定の構文への変形規則などがある，とされている。

ここで，テーマ・レマ構造における内容と形式の関係を，便宜上，言語記号の性質になぞらえて明らかにしておきたい。まず，上述の統語「形式」が3～6の「内容」的定義を「表示する手段」である，という言い方をする場合には，両者の関係は，言語記号の形式面（signifiant）と内容面（signifié）との関係ではなくて，言語記号と言語外の概念構造との関係として捉えられている。これに対して，上述の形式的定義を行なっている論者を中心に，「文の第1次アクセントは新情報を表わす」とか「個別的（partikulär）用法の定冠詞は既知を表わす」とか「文頭の位置は主題を表わす」といった言い方がされることも多く，この場合には，統語「形式」と「内容」的定義との関係は，表裏一体の言語記号の形式面と内容面との関係として捉えられている。本来，言語学は概念世界から出発してそれを表わす形式を求めるのではなくて，形式から出発してその内容を求めるのが任務であるからテーマ・レマ構造の言語学的研究においてはこの2つの捉え方のうち後者を採らなければならないだろう。

ところで，後者の捉え方に至るには，上述の統語形式が3～6の内容的定義に用いられた基準概念によって余すところなく説明できること，つまり文アクセント付与，個別的用法の定冠詞選択および文頭の位置への語順変更規則の決定要因が，それぞれ新情報，既知性，主題性のみであることが証明されなければならない。ところが実際には，これらの基準概念は研究の初期に直観的にそれぞれの統語形式の表わす内容として設定されたために，「文アクセントがあるから新情報である」とか「個別的用法の定冠詞がついているから既知項目である」とか「文頭にあるから主題である」といった循環論法の域を出ないことが多かった。テーマ・レマ構造の研究につねに付着してきたこの曖昧さを払拭するためには，それぞれのテーマ・レマ構造の基準概念を客観的に検証可能にすること，つまり，ここで問題となる言語直観を明確な形で対象化することが必要だろう。こうして初めて，基準概念と統語形式との対応を探ることが可能となる。

本稿は、以上の観点に立って、4, 5の基準概念を精密に分析した上で、これを文アクセントという一形式がどのように「切り取って」いるかを中心に考察することを通じて、テーマ・レーマ構造における内容と形式との対応関係の解明に寄与せんとするものである。対象言語はドイツ語である。

さて、文アクセント研究においてテーマ・レーマ構造に言及されることは多かった。K. BOOST や E. DRACH の流れを受けた伝統的研究では、文アクセント現象の説明のために、対照・強調・通常アクセントの区別と統語的に定まったアクセント型（例えば名詞句は最後の要素にアクセントが置かれるなど）とならんで、既知・未知の概念が中心に据えられ、それで済まない場合は、「重要性」とか「伝達価値」などが拠り所とされるか、例外とされた。また、生成音韻論の立場からのドイツ語文アクセント研究においても、早くからテーマ・レーマの考えがとり入れられて規則作成がなされたが、統語構造依存の原則との兼合いやテーマ・レーマの定義の曖昧さなどに問題を残したままである。文アクセントの研究においても、テーマ・レーマ構造との関係を解明することが焦点なのである。

なお、本稿では「文アクセント」によって文中の最も強いアクセント（第1次アクセント）を表わすことにする。発話速度が遅くなれば、発音上の区切りが多くなり、一文中に複数の文アクセントが現われることもあり得る。⁽³⁾ また、例文は原則として一定の文脈に置かれたものを選んだが、⁽⁴⁾ 例文中、引用文献が付記されていないものは、すべてインフォーマントの情報によるものである。

1. 対照構造・強調構造と文アクセント

1.1 通常・対照・強調アクセントの区別

文アクセントの研究においては、通常アクセント (Normalakzent), 対照アクセント (Kontrastakzent), 強調アクセント (Emphaseakzent) の3種のアクセント類 (Akzentklassen) を区別するのが通例である。議論は省略するが、この区別なしには文アクセントの規則性は極めて大まかにしか捉えられないと思われるし、また前節で挙げたテーマ・レーマ構造を表示する統語形式の研究においてはこの区別が言語現象を説明するための決定的な拠り所となってもいる。結論から言えば、通常アクセントのみがテーマ・レーマ構造に係わっており、対照・強調アクセントはこれとは⁽⁵⁾ レベルを異にする対照・強調構造に係わる現象である。本節では後者を定

義づけることによって、前者を間接的に規定しておきたい。

Koda (1976, 15-25) において、疑問文テストによるアクセントの分類を行なった結果、対照アクセントの一部と強調アクセントはこのテストの射程に入らないことが分かった。そこで本稿では、文アクセントの現われる文脈構造に基づいた分類を行なってみる。なお、以下では文アクセントの置かれる位置を / で、話者を A, B, … で表わすことにする。

4. 対立的対照構造

7. Ich habe das Buch sicherlich nicht verlóren, sondern nur verlégt. (Trojan 1961, 26)

8. Ich gehe zu Peter. Péter habe ich gern. Háns nicht. (Dresler, 1973, 78)

9. Ér liest die Zéitung, aber síe liest sie nicht.

7~9のそれぞれの最後の文は省略文であるが、省略を補った場合7と8では前文と同一の文法関係を持った文が復元できる。逆に9の第2文において第1文と共通の要素は省略可能である。つまり、7~9のようなアクセントの現われる文脈は、同一の統合環境における α と β が一方が肯定され一方が否定された形で対照されている構造を持っている。そして、 α , β には動詞(7), 目的語(8), 主語(9)のほか、ほぼすべての構成素が立ち得る。(本節ハの項参照)そこで、この構造をP, Q, R, …を定項とし、 α , β , γ , …を同一範疇に属する任意の構成素として定式化すると次のようになる。

10. $P\alpha Q$: nicht $P\beta Q$ (ただし、10は基底構造とする)

10の前半部と後半部は7に見られるように入れ替わることもあるし、以下の例のように一方が省略されていることもある。ただし、省略された一方の文は、場面や(11), 他の文の含意(12)などによって復元可能でなければならない。

11. (Auf dem Tisch liegen ein Buch und eine Zeitung.)

Peter nimmt sich das Búch und schlägt es auf.

12. A : Ist all dein Vieh verbrannt?

B : Das Kálb wurde gerettet.

11には、Peter nimmt sich nicht die Zeitung が、12には、Das úbrige Vieh wurde nicht gerettet が省略されている。

10の2文において対照されているのは、それぞれ1つずつの要素であったが、13では2つずつの要素が対照されている。

13. Er hat sie geschlagen und dann hat sie ihn geschlagen.

13の構造は、基底では $P\alpha\beta Q : P\beta\alpha Q$ であるから、10の α , β は関係を逆にした2つの要素から成り立ち得るという条件をつければ、結局は10の構造に含まれることになる。実際、このような関係に立ち得るような要素は、主語と直接・間接目的語の組み合わせのうちでもごく限られたものしかないようである。

10のような対照構造を仮りに「対立的対照構造」と名付けておく。

ロ. 対比的対照構造

14. Kláus wohnt in Múnchen und ích wohne in Berlín. (Bierwisch, 1965, 151)

15. Gestern habe ich einen Mann und eine Frau getroffen. Ér trug eie Tásche und síe einen Kóffer. (Harweg 1971, 262)

16. Eva erhält die grüne und Gabriele die blaue Vase. (Trojan, 1961, 25)

14~16では、連続した2つの文の中の2つの相互に異った要素がそれぞれ対照されている。そのうち1番目の要素は16でアクセント記号を付されていないことから分かるように、2番目の要素より弱いアクセントを受ける。また、1番目の要素は文頭にくることが普通だが、特別な場合には文中にくることもある。

17. Klaus wóhnt in Bónn und studíert in Kóln.

対照される2つの要素にはほぼすべての構成素がこれるので(本節ハ参照), α と r , β と δ はそれぞれ同一の統語環境にあるものとして14~17の文脈構造をイの場合と同様に定式化すると次のようになる。

18. $P\alpha Q\beta R : PrQ\delta R$

18のような対照構造を「対比的対照構造」と名付けておく。

ハ. 文脈外文脈構造

18. A : Peter hat sie geküßt.

B : Was? Wer hat sie geküßt?

(または, Hat Dieter sie geküßt?)

A : (Nein.) Péter (hat sie geküßt).

19の文アクセントは諸家により、対照アクセント、強調アクセント、訂正アクセント、または教授上のアクセント (didaktischer Akzent) などと呼ばれている。19の最後の文は、訂正や確認のためにすでに発話された文を言い直したに過ぎないものであるから、言語使用に對する言語使用

(メタ言語使用)のうちでも、通常の文脈の流れを止める特殊なタイプに属する。このような通常の文脈構造を持たない文に現われる文アクセントには、対照・強調アクセントとは別個のアクセント類が割り当てられるべきであろう。この考えを支持する言語事実として、文法関係により一義的に定まった、いわゆる文法語には対照構造や後述する強調構造が作り得ない、そして、これらの語が文アクセントを受ける場合、常に訂正の機能を持つ、ということがある。(Jung, 1968, 163 参照) 以下に Jung の例を挙げる。

20. Er ist größer als ich (nicht: wie ich).

21. Es ist notwendig zu schießen (nicht: zum Schießen).

20, 21の als と zu は一見, () 内の wie ないし zum と対照を成すように見えるが, 20で als の代りに wie を入れれば非文になってしまうし, 21で zu の代りに zum を入れれば文法主語の Es は前方照応の代名詞になり, 動詞の schießen は名詞になるから, 2文の関係は, 対照される要素以外は同一でなければならないという対照構造の条件に当たらない。ただしこの2文は音声上は zu と zum 以外が同一である。そこで19~21の文脈構造を定式化すると,

22. A : P α Q : B : P β Q : A : P α Q (ただし, 各項は音声表記上の要素とする)

ニ. 強調構造

各種文法書などに強調アクセントとして挙げられている文例を見ると, 上述の対照アクセントに還元できるものが多い。対照構造が発見できない例として23~25がある。

23. Welche wúndervolle Überraschung! (Trojan 1961, 26)

24. Welche Freude, dich hier zu treffen! (Jung, 1968, 163)

25. Aber Ténnis spielen will er doch nicht.

23の Welche の代りに sehr を, dich および Tennis の前に gerade を入れてみれば強調の内容がはっきりする。それぞれ, 「とても素晴らしい」, 「ちょうど運よく君に」, 「(医者に勧められたが) ちょうどテニスをするのが嫌いときている」などの感じが文アクセントに込められていよう。このような文アクセントの現われる文脈を再構成するのに, テキスト言語学で市民権を得ている「期待 (Erwartung)」(Dressler, 1973, 55ff) という概念が使えるのではないかと思われる。発話時点に話者・聴者が期待していなかった事態が起こったことに対する驚きや喜びや怒りが強調アクセント

トの実質であると思われるからだ。23は、話者が平常期待している驚きの素晴らしさの程度から、実際の素晴らしさが隔っていると解釈できる。そこで、強調の文脈構造は、nicht-e () によって、() 内の事態を話者・聴者が期待していないことを表わせば次のようになる。

26. nicht-e ($P\alpha Q$): $P\alpha Q$

以上、2種の対照構造(イとロ)と強調構造(ニ)、文脈外文脈構造(ハ)を定式化した。イとロに現われる文アクセントが対照アクセント、ニに現われるものが強調アクセント、イ～ニのすべての文脈構造が認められない文脈中に現われるものが通常アクセントである。

1.2 通常アクセントの作用域

文アクセントを与えてみると、それが必然的に対照構造、文脈外文脈構造、または強調構造を含意してしまうような語がある。それは、冠詞、代名詞、前置詞、接続詞、助動詞、心態の不変化詞、文副詞などである。従来、これらの語には通常アクセントが置かれない、という言い方で済まされることが多かったが、最近では、代名詞を除けば(2節参照)、「独立した文成分(Satzglied)を成さない構成素および文アクセントの作用域の外にある構成素は通常アクセントを受けない」と言った方がより有意義な一般化が行なえることが分かってきた。Clement/Thümmel (1975)は、彼らの文の階層的修飾構造の分析において、通常文アクセントを Tonbruch という統語構成素として設定している。それによると、文の樹形図表示において、Tonbruch に支配される節点が文アクセントの作用域であり、Tonbruch が支配される節点が作用域の外となるが、後者には上述の心態の不変化詞、文副詞、接続詞、助動詞のほか、問投詞、帰結文、sondern の導びく節、「位置変副詞(Rangierpartikeln)」と呼ばれるものなどが入れられている。これらは、3節に見るように、5の情報構造の範囲外になるものと一致する。

ただし、上述の原則は、前置詞、接続詞に関しては、次のような場合に破られることが、Fuchs (1976, 309) によって報告されている。

27. in manchen Fällen ist der Tonhöhenabstieg auf eine einzige Silbe konzentriert/die wirkt auch gelängt/was aber vielleicht *durch diesen starken Abstieg* kommt

28. (Zu einem Kind, vor dem Schlafengehen. Die Mutter hatte gesagt, daß sie noch vorlesen könne, wenn sich das Kind bald ausgezogen und gewaschen hätte. Nach einer Weile :) Jetzt

eil dich schön damit wir noch was lesen können

これらの文中のイタリック体の部分は、前置詞、接続詞を除けばすでに言及された既知の部分となっている。ところが、それが含まれる文の中では、それぞれ、原因、目的を表わす副詞全体として新情報を成している。この矛盾のためにアクセントは仕方なく、通例アクセントの置かれぬ語にきているのである。これを、「アクセント転移現象」と名付けておく。

2. 既知・未知構造と文アクセント

0 節の 4 に大まかに規定された既知・未知構造は、その分節の基準概念によってさらに 4 つに分類できる。

29. 先行する言語的文脈からそれと同定できるか否か〔±*vor erwähnt*〕

30. 先行する言語的文脈および言語外の場面（状況）からそれと同定できるか否か〔±*kontextuell gebunden*〕

31. 話者が聴者にすでに知られていると思っているか否か〔*known/unknown*〕

32. 発話時点に聴者の意識に上っているか否か〔*on-stage/off-stage*〕

29は30に含まれ、さらに30は、言語的文脈・場面以外に話者・聴者の知識も加わっている31に含まれる。つまり、29から31へ進むにつれ、既知性の概念は拡がっていくが、32にいたって縮小するという関係がある。以下、それぞれの既知性の概念をさらに精密化しつつ、文アクセントとの関係を考察してみたい。なお、以下では文アクセントは通常アクセントに限る。

29, 30で「言語的文脈から同定できる」と言う場合、同定のでき方にはさまざまなものがある。Harweg (1971) は、既知とされる言語表現とその既知性を保証する先行文脈中の言語表現との関係を、同一、非同一、半同一の3種に分類して文アクセントとの関係を詳論しているが、次に Allerton (1978, 10) を参考にやや詳しくして列挙してみる。

33. 同一 a. 代名詞化 (*ein Pferd—es*); b. 同一名詞 (*ein Kleid—das Kleid*); c. 同義語 (*ein Auto—der Wagen*); d. 上位語 (*fünf Mark—das Geld*); e. 関連語 (*Goethe—der Schriftsteller*).

34. 非同一 a. 部分 (*ein Haus—die Tür*); b. 全体 (*sein Ellbogen—der Arm*); c. 下位語 (*Alkohol—Whisky*); d. 文化上の関連語 (*eine Revue—der Star*); e. 自然上の関連語 (*ein Blitz—der Donner*).

35. 半同一 同一物の変化した物 (*Gustav Aschenbach—der Knaube*).

33のe)と34のd), e)における関連語が既知として成り立つためには、話者が聴者にそれぞれ, „Goethe war Schriftsteller”, „In einer Revue ist ein Star tätig”, „einem Blitz kann ein Donner folgen”という知識があることを前提にできなければならない。これらの文を省略された先行文脈と考えれば, 関連語は結局, 33のb)の同一名詞の反復に還元できることになる。また, 33~35は, 個別的用法の定冠詞選択を決定する条件にはかならない, つまりこの意味での既知性は同用法の定冠詞の内容(0節参照)を成している点に注目しておきたい。

さて, 33~35の分類と文アクセントの関係について Harweg (1971)はまず, 「33は文アクセントを持たず, 34と35は持つ」と結論している。ところが, Harweg は34のb)を考慮に入れていなかった。Allerton (1978, 10)は, 英語ではこれが文アクセントを受けないとしているので, ドイツ語で調査したところ同様の結果を得た。

36. Gestern hatte ich mit *meiner Handbremse* Schwierigkeiten.
Und ich habe das Auto in die Wérkstatt gebracht.

37. Er hat sich *das Knie* verletzt. Jetzt muß er das Bein schönén.
36の第2文において, *das Auto*の代りに *ein Auto*を入れて, 第1文なしに単独で発話すると *Auto*に文アクセントがくることから, 部分一全体の関係は, 33のタイプに入ることが分かる。全体一部分, 上位語一下位語はアクセントを受け, 全体一部分, 下位語一上位語は受けないという事実から, 文アクセント付与に関係するのは, 指示対象の同一, 非同一ではなく, 意味情報の多少ではないかと思われる。

次に, 場面から既知とされる言語表現は, 文アクセントを受ける場合(38)と, 受けない場合(39)がある。

38. Siehst du den Mánn da hinten? (Harweg, 1968, 148)

39. (A und B sitzen am Tisch. Auf dem Tisch liegt eine Geldtasche.) A: Ich habe die Geldtasche gefúnden.

つまり, 指し示す動作なしに聴者に同定できるものはアクセントを受けない。

ここまでの規則性は, 31の「話者が聴者にすでに知られていると思っているか否か」という基準によって説明できる。しかし, すでに知られているものでもアクセントを受ける場合がある。このような場合として, Harweg は, 既知語と先行文脈中の指示語との間に別の文がいくつか入っている場合(Distanzposition)と, 既知語が話題の中心からはずれる

場合 (Defokkusierung) を挙げている。第1の場合には、言語外の知識として聴者に当然知られているものを突然話題にするような場合(40)も含まれよう。

40. Ich habe gestern deinen Vater gesehen.

Chafe (1976, 30) は、このような言語事実を説明するために既知性の概念を32に挙げたように局限し、「発話時点に聴者の意識に上っている」要素はアクセントを受けず、「上っていない」要素はアクセントを受けると断定する。しかし、40とまったく同様に意識に上っていないにもかかわらず、41の Vater にはアクセントが置かれていない。

41. Wie géht's deinem Vater?

逆に42や3節(71~74)に見るように、明らかに意識に上っているにもかかわらずアクセントを受ける場合も多い。

42. „Ich bin mit *meinem Kind* allein“, klagte sie der Nachbarin. „Wenn ich ausgehen muß, wacht niemand über meinen Kléinen. (Stötzer, 1973, 43)

これらのことから、意識性に基準を置いた32は、アクセント現象の説明のためには十分でないように思われる。(しかし、Chafe はまさにこのために32を提案しているのだから、32は言語を離れた心理学上の構造ということになりそうである。なお、意識性については3節で再度取り上げる。)

33~35の分類は個別的用法の定(代)名詞に限られていた、まずこの分類の中で漏れているものを挙げると、動詞(句)や文の(代)名詞化(43)がある。これらは、33と同じ振舞いをする。

43. Er versuchte, die Wahrheit zu begründen. Aber *der Versuch* (...)

さらに、33~35の分類の外にあるものとして、話者・聴者の知識に含まれている総称名詞、固有名詞、唯一名詞の初出のもの、不定(代)名詞の再出のもの(44)、形容詞、動詞、文などの再出のもの(45)がある。

44. Brigitte wollte eine Puppe haben. Als sie *eine Puppe* bekam, spielte sie nicht damit. (Heidolff, 1966, 82)

45. (Am Ende des Radiokonzerts:) Sie hörten „die Kleine Nachtmusik“ von Schubert. *Gespielt* hat die Berliner Philharmonie (...)

これらの表現については、初出のときはアクセントを必ず受けるが、再出のときは33と同様受けたり受けなかったりする。

本節の考察の結果，既知・未知構造（29～31）と文アクセントとの関係は次のようにまとめることができるだろう。（±Aはアクセントの有無を表わす。「不定（代）名詞ほか」には，さらに名詞以外の文成分がはいる。）

既 知					未 知	
定（代）名詞			総 称 ・ 固 有 ・ 唯 一 名 詞		不定（代）名詞ほか	
代名詞	同一・全体・名詞化	非同一	再 出	未 出	再 出	初 出
-A	±A	±A	±A	+A	±A	+A

3. 旧情報・新情報構造と文アクセント

旧情報・新情報構造（以下，情報構造と略す）と呼ばれるもののうち，ここでは「話者前提」（Sprecher-Präsupposition）と「話者主張」（Sprecher-Assertion）への文の分節を取り上げる。この意味の情報構造を発見するため操作手段として疑問文テストが用いられることが多い。これはある文に対して補足疑問文を作ってみた時，疑問詞で置き換えられた部分が新情報それ以外の部分が旧情報に当たる，というものである。さて，補足疑問文の答えにおいては疑問詞に対応する部分につねに文アクセントが置かれることは紛う方もない事実であるから，もし，このテストがあらゆる文に対して有効に適用され得ることが示されたならば，「文アクセントは新情報にあたる部分に置かれる」ということが立証できるわけである。ところが，通例はこのような手続きもなしに，この主張がなされたり，逆に「文アクセントが置かれているから新情報である」といった循環論がまかり通っていることはすでに指摘した通りである。（0節参照）要は，上記の意味での情報構造が，補足疑問文や決定疑問文の答え，分裂文，否定文といった特殊な文脈に置かれた文以外の「普通の」文脈中の文にも存在しているのか，という問題に絞られる。本節では，補足疑問文テストに対してなされている，イ，それが操作している内容が不明である，ロ，現実の文脈中に置かれた文に対しては疑問文の作成が困難である，ハ，もし，適用できても複数の疑問文が可能な場合が多い，という批判（Weigant, 1979, 176; Grewendorf, 1980, 31ff）を順次検討することを通じて，この意味での情報構造は「普通の」文脈中に置かれた文にも存在していることを示してみたい。これが示されれば「文アクセントは新情報部分に置かれる」という主張が根拠づけられたことになることは言うまでもないことであろう。

イ、補足疑問文テストの内容

46は47～53の補足疑問文の答えとなり得、それぞれ文アクセント、イントネーションによって区別が可能である。(↗, ↘, →はそれぞれ上昇、下降、平板イントネーションを表わす。)

46. Peter schlägt Erich.

47. Was geschieht?—Peter schlägt Érich↘.

48. Was tut Peter?—Peter↗ schlägt Érich↘.

49. Was geschieht mit Erich?—Peter schlägt↘ Erich→.

50. Wer schlägt wen?—Péter↘ schlägt Érich↘.

51. Wer schlägt Erich?—Péter↘ schlägt Erich.

52. Wen schlägt Peter?—Peter schlägt↗ Érich↘.

53. Was tut Peter mit Erich?—Peter↗ schlägt↘ Erich→.

47～53は、46に対する可能な情報構造上の文脈を操作的に作り出し (simulieren) ていると考えられる。例えば、47では、何かが起きていることが前提とされ、それがペーターがエーリヒをなぐっていることだと主張されており、51では、誰かがエーリヒをなぐっていることが前提とされ、それがペーターであることが主張されている。このような前提・主張構造は、Bartsch (1972) などによって明確な形でメタ言語化されうようになった。本稿では詳しく立ち入れないが、要は、従来の名詞 (句) を表わす個体変項と述語のほかに、動詞 (句) を表わす現象 (状態) 変項、時制を含まない文を表わす生起 (状況) 変項、時制を含んだ文を表わす事実 (事態) 変項を導入して、前提はこれらのうちいずれかの変項の存在前提 (Existenzpräsupposition) によって、主張はこの変項と述語との同一主張 (Identitätsassertion) によって表現するものである。この表現法によれば、29～31の既知性は各変項の定項表示によって、情報性は前提された変項とその述語との関係の新しさによって定義できる。これで、疑問文テストの表わす内容が不明である、という批判は、根拠を失うのではなからうか。

ロ、疑問文テストの作成

次に、具体的な文脈中にある文に対して疑問文テストを適用してみる。まず、疑問文テストがそもそも不可能な文としては、決定疑問文、命令文のほか、1.2節で挙げた通常アクセントの作用域の外にある語を含んだ文である。例えば、

54. ? Was tut Peter *wahrscheinlich*?

55. Wer ist nach Hamburg gefahren?—**Nur* (?*Grade*) Hans ist nach Hamburg gefahren.

54のような文においては法的要素を取り除いた命題部分については疑問文が可能である。つまり情報構造は命題部分についてのみ問題にし得る。55のような文もイタリック体の語⁽⁶⁾を除けばよい。従って、これらの文に疑問文が作成できないのは、疑問文テストへの反論とはならない。

さて、56の第2文に対しては57～59の疑問文が作れる。

56. Es war ein junger Hirte, der wollte gern heiraten (...)
(Trojan, 1961, 30)

57. Was passierte?

58. Was passierte mit dem?

59. Was wollte der gern?

これに対して、56の第1文から前提されることは、60～63である。

60. Etwas passierte.

61. Der junge Hirte tat etwas.

62. Der junge Hirte war soundso.

63. Etwas passierte mit dem jungen Hirten.

ある世界があった以上、そこでは何かが起こったはずだし(60)、ある人間が生きていた以上、彼は何かをしたり(61)、何らかの状態であった(62, 63)はずである。このような先行文脈から聴者に当然予想できるとされる前提から話者は1つを選んで語り進めていく。従って、文脈を持った文の情報構造を発見するには、先行文脈から当然予想される前提文と、当該文に文法的・意味的に可能とされる補足疑問文との共通部分を求めればよい。56については、57(=60)と58(=63)である。

64. Ein feines Bauerndirnchen ging einst an einem Weiher vorüber; da sah es am Rande eine große, dicke Kröte sitzen.
(Trojan, 1961, 30)

同じテキスト初頭文とはいえ、64の第1文から引き出せる前提は56の第1文よりはるかに多い。ここには、60～63に対応するもののほか、Das feine Bauerndirnchen machte etwas mit dem Weiher, Etwas war los mit dem Sachverhalt (事態), Etwas war los mit dem Vorgang (現象) (本節イの論理変項を参照) など10ほどが考えられる。従って、實際上情報構造の検出にあたっては、第2文に補足疑問文を作り、そこに現れる疑問詞を etwas で置き換えてみて前提として可能かど

うかを調べるという手続きをとることになる。64については、Was passierte?, Was passierte da?, Was passierte mit dem Dirnchen?, Was passierte da mit dem Dirnchen? の4つの疑問文が可能であることが分かる。確かに Weigand らの言うように、疑問文テストは唯一的な結果はもたらさないが、以上の方法によれば有効に機能することが分かった。

ハ. 疑問文の選択

さて、話者が文にただ一つの情報構造を担わせて発話していることを証明するには、以上の疑問文テストの網の目にかからなかった部分が、何らかの別の要因によって決定されていることを示せばよい。この部分が、話者の自由選択に任されているといっても、その選択は話者のテキスト構成上の方針・意図によって規制されていると考えられるから、前後の文脈からそれは見て取ることが出来るはずである。この点での考察がまだ不十分であることは認めざるを得ないが、これまでに明らかになった2点について報告しておきたい。

a. 47の情報構造が現われる文脈

65. A : Kommt Fräulein Rennwald nicht?

B : Ihr Vater ist verunglückt. Sie mußte nachhause

66. Präsident Kénnedy ist ermordet worden.

67. Tante Hélga läßt euch grüßen (または hat angerufen, wartet im Zimmer).

68. Dort war im Schilf eine Öffnung, eine Tréppe führte hinunter. (Trojan, 1961, 35)

69. Die Sónne scheint. Die Blúmen blúhn. Die Vógel singen. Altes Herz wird wieder jung. (Essen, 1964, 53)

65, 66は Fuchs (1976, 305ff) の例文であるが、彼女は、主語+述語(または動詞)構文において主語にアクセントを持つ型は「それによって伝達された事態(状況)が、既存の視点に対していわば接するような (tangential zur jeweilig gegebenen Perspektive) 関係」でテキスト構成に参加している、と述べている。65~69をさらに分類するなら、65が後文の理由、66と67が「ニュース文」、68が新場面の導入、69が情景描写であるが、すべて文全体の表わす新しい事態が後続文脈との関係で問題とされている。⁽⁷⁾同様のことは、同じ情報構造を持つ主語+動詞+目的語の構文にもみられることが、Dressler (1970, 66ff) によって指摘されている。

70. Dieses Gebäude hat Heinrich von Ferstel erbaut. (Heinrich von Ferstel hat dieses Gebäude erbaut.)

70'. Es hat dieses Gebäude Heinrich von Ferstel erbaut.

Dresslerによると、70の2文はこれで完結した情報となっているが、70'は前か後に別の文が続かなければおかしいと言う。70は48、70'は47の情報構造を持った文と解釈されているからであろう。

以上のことから、47の情報構造の文は、テキスト構成上、非自立の単位を成し、文脈上はこの単位全体が周辺的な役割で係わっているだけで、その中の主語は話題(Hyperthema)にはなり得ないことが分かる。従って、56および64の疑問文テストで現れた „Was passierte?“ は不可能だったことが分かる。これらの後続文脈ではそれぞれ、*der junge Hirte*, *das Dirnchen* が話題の中心に置かれているからである。

b. 48の情報構造の現れる文脈

48の情報構造をもつ文のうち、本節口の疑問文テストによると、47、48、53の3つが可能とされるものを取り上げ、選択の根拠を求めてみる。

71. Diese (die Mutter), während *der Hund* die Kinder loßläßt (…), setzt den Eimer neben sich nieder, (….) umklammert sie mit Gliedern, (….) den Hund. (Trojan, 1961, 51)

72. *Es* (das Kätzchen) kroch auf ihn hinauf und schief dort wieder ein. Ein wenig später erwachte die Leopardin, (….) und griff mit ihren mörderischen Pfoten nach der Kátze. (Stötzer, 1973, 44)

73. *Beide* gerieten in einen heftigen Streit. „(…)“, sagte ein größerer Junge, der eben dazu kam. Er stellte sich zwischen die beiden Knáben, (….) (Trojan, 1966, 38)

74. *Die Welt* ist alles, was der Fall ist. Die Welt ist die Gesamtheit der Tatsachen. (….) Die Tatsachen im logischen Raum sind die Wélte. (Harweg, 1971, 156)

71~74では、それぞれ最初の文のイタリック体の語が最後の文中で再び現われながら、文アクセントを受けている。つまり、これらの文には、47、48、53の情報構造が可能であるのに48が選ばれている。この選択が何によって決められているかを考えてみよう。

71は、子供を何人も喰み殺したことのある犬が、自分の子供に襲いかかっている所に出くわした母親を描いている。犬は子供たちを離して母親に

向かってきた。ここでは「母親が何かをした」ことが前提となっており、「母親が獰猛な犬に対して何かをした」ことは前提としがたい。そこで „Was machte die Mutter?“ という問いが選ばれた、と考えられる。72の文脈は、子守りの子猫が、ヒョウの母親にいつ襲われるか恐れながら、毎晩床に就くという緊張感のあふれた話で「次にヒョウが何をするか」が問題となっている。そこで „Was machte die Leopardin?“ という問いが選ばれている。

しかし、73については „Was machte er mit den beiden Knaben?“ という問いはもともと意味的に不可能である。これは、文の構成(情報構造の基礎単位としての)に係わっているのは方向を表わす副詞句(zwischen die beiden Knaben)全体であって、その中の名詞句ではないからである。さらに言えば、動詞が新情報を表わす限り、方向の副詞は前提にはなり得ない。というのは、方向が分かっているということは動詞が方向の副詞をとる動詞であることも分かっているからである。従って、73では „Was machte er?“ が選ばれたわけだ。このような構文で動詞にアクセントが置かれると対照構造を含意してしまう。以上の事情は、75を見れば明らかとなる。

75. *Aus dem Fenster hat man einen schönen Anblick. Er stellte sich ans Fenster.*

なお、73では、zwischen にアクセントを置いたインフォーマントがいたが、これは1.2節で挙げておいたアクセント転移現象である。

最後に、74についても同様のことが言える。「XはYである」という命題文にあっては、対照・強調構造のない限り、Yにアクセントが置かれる。74の最後の文で、もし、Tatsachen im logischen Raum にアクセントを置けば、die Welt は「心理上の主語」になるが、すると、第2文以下と同じ内容を表わすことになり、情報構造上の文脈として不適當となる。 (話者はつねに新しい情報を提供する義務がある。)

a, bの考察から、情報構造における前提(旧情報)の選ばれ方は、文脈からかなりの部分まで推定できることが分かった。ここに関与している要因のカタログ化は、さらに詳しい後日の研究に待ちたいが、おそらくは、話者のテキスト構成上の「視点」、「登場人物」の数やその入れ替わり方、「登場した個所からの隔り方」、物語中の時間の経過などが関係していることは間違いなく、⁽⁸⁾ 会話、物語、論説文などテキストタイプ別の研究が必要であろう。

54に対する残された3つの疑問文のうち、どれが選ばれているかは、今のところ決定のしようがない。しかし、疑問文テストが唯一的に決定できないというのは、情報構造の存在の否定には直接つながらない。それは、言語が連続的 (undiskret) 性格を持っていることの現われと解釈することができるのではないか。少なくとも、bで挙げた例文や3節の84, 85は、2節で論じた既知性 (Chafeの意識性も含めて) の概念によっては説明がつかない。6の伝達価値については本稿で検討していないけれども、きわめて客観的把握が困難であるとされている以上、本節bで見たようなアクセント現象に情報構造が最大の決定要因として係っていると推論することは十分妥当なことだと思われる。

ここで、「最大の要因」と言ったのは、確かに文アクセントは新情報に置かれるが、新情報部分内部での位置はまた別の要因によって制御されているからである。通例、「文アクセントは新情報の最後に置かれる」と言われるが、これが必ずしもそうではないこと、それが何によって決められているかを次節で見たい。

4. 統語・意味構造と文アクセント

文アクセントが新情報を表わす部分の最後の要素にこない場合として、76~81が挙げられる。

イ. 主語 + 動詞

76. Ein Brief kommt an.

(他の例は65~69)

ロ. 目的語 + 枠構造終結成分

77. Er aß einen Kuchen auf.

78. Er hat ein Haus gebaut.

79. Er brachte eine große Arbeit zum Abschluß.

ハ. 目的語 + 形容詞

80. Er ist einem Affen ähnlich.

ニ. 目的語 + 方向の副詞

81. Er brachte eine Torte ins Zimmer.

イ~ニの規則性は、伝統的研究においては見逃されることが多かったが、これをより大きな枠組で明確に規定したのが、Haftka (1981) の基本語順の研究である。それによると、ともに新情報を表わす複数の要素の語順を変えてみて最も正常と判断されるものが基本語順とされ、その際、文ア

クセントを受ける順位が相対的に確かめられ、もっとも優先順位が高い所に文アクセントの位置が設定される。()内にその優先順位の番号を入れてこれを挙げると、時・因由の副詞(10)→主語(8)→場所・手段の副詞(6)→間接目的語(5)→4格以外の直接目的語(4)→4格の直接目的語(2)→文アクセント←主格または4格の述語(1)←方向の副詞(3)←形容詞または前置詞述語(7)←動詞(9)である。複数の要素が並んだ場合、より数の小さい番号をもったものがアクセントを受けるということになる。

次に、この基本語順によって特定の文のテーマ・レーマ構造が限定されていることを見ておきたい。

82. *Peter gibt das Buch Erich.

82は、Was gibt Peter Erich? の答えになるはずであるが、非文法的である。久野(1978, 54ff)はこの現象を説明するために、「文中の語順は古いインフォメーションを表わす要素から、新しいインフォメーションを表わす要素へと進むのを原則とする。」という規則を立てている。しかし、83の答えの文はこの規則に従っていないにもかかわらず文法的である。

83. Wem gibt Peter das Buch? Er gibt Erich das Buch.

久野は、これは83が基本語順そのままであるのに対して、82がそれをわざわざ変更しているからだとし、この種の規則に「意図的に」違反した場合にのみペナルティーが課せられ非文法文が生じるという規則を立てている。このことから、新情報に含まれている要素が表層語順においてその基底語順においてとるべき位置より前に来ているような場合はありえないということになる。

最後に、新情報部分の中での文アクセントの位置が動詞の意味によって決定される例を挙げておく。

84. Kuck mal! Da kommt ein Auto.

85. Kuck mal! Das Auto schléndert. (? Da schleudert ein Auto.)

84と85は同様の情報構造、つまり „Was geschieht?“ により質問される構造を持っていることは明らかである。ところが、前者は主語に、後者は動詞にアクセントを受けており、また冠詞選択も異っている。Allerton(1979, 44ff)は、定表現の主語+述語(動詞)の構文で主語がアクセントを受けるのは、動詞が特殊な意味を持つ場合に限られており、それは、内容の乏しい動詞、出現(消失)の動詞、損失の動詞の3種であると述べている。ドイツ語においても、それぞれ、69, 66, 65が例として挙げられるが、67のようなものはAllertonによって考慮されていないことを

付け加えておきたい。また、同様のことは、冠詞選択と必ず結びついているが、主語+動詞+目的語の構文にも見られることを指摘しておきたい。次の第1文は、対照・強調構造を含意してしまう。

86. Er hat eine Stádt verlassen. (Er hat die Stadt verlassen.)

87. Wir haben das Haus gebáut. (Wir haben ein Háus gebaut.)

さらに、動詞の意味が言語外の常識との絡みで文アクセントに影響する場合がある。以下は Beneš (1962, 12ff) の例文である。

88. Ich habe gestern wieder einmal Fránz gesehen.

88'. Ich habe gestern wieder einmal Franz 'réingelegt.

89. Er hat die ganze Nácht getanzt.

89'. Er hat die ganze Nacht gebúmmelt.

88' と 89' では、動詞の意味が他の語との結びつきにおいて、常識をはずれているからアクセントを受けているのではないかと思われる。すべて、„Was habe ich (hat er) getan?“ の文脈に現われうる。

5. ま と め

以上、通常アクセントを、その現われる文脈を定義することによって、対照・強調アクセントから区別し、更にその作用域を限定した上で(1節)、それが既知性(2節)、情報性(3節)を基準とするテーマ・レマ構造をどのように「切り取って」いるかを中心に論考した。その際、まず、曖昧にされてきた既知性、情報性の概念を客観的に検証可能な形で明示化した上で、文アクセントとの対応関係を調べていくという手続きをふんだ。ただし、新情報は当該文に対する補足疑問文中の疑問詞に対応する部分であると定義できるから、文アクセントが新情報に置かれることを証明することは、疑問文テストが文脈中に置かれた文に有効に適用できるか否かを証明していくことに他ならなかった。

その結果、一定の表現は、既知・未知構造によって文アクセントを受けうるか否かが決定できるが、別の表現はこのレベルでは決定不可能であること、この決定は情報構造によっていることを示せた。ただし、情報構造で前提としうるものは、既知とされたものだけなので、情報構造は既知・未知構造の上に成り立ち、そこから、話者のテキスト構成上の方針によって、一定の情報構造のうち一つが選ばれているという関係にある。この話者の方針は文脈中から大部分読み取れるだろうという仮定のもとに、いくつかの規則を発見できた。

最後に(5節), 文アクセントは新情報部分に置かれるが, その内部での位置は統語構造(基本語順)と意味構造(動詞の意味)によって決定されていることを示した。

以上のことから, テーマ・レーマ構造と文アクセントとの対応関係は, 既知・未知構造については間接的, 情報構造については部分的なものであると結論することができよう。さらに, 対照・強調アクセントを文アクセントに含めて考えれば, テーマ・レーマ構造は1次, 対照・強調構造は2次, 文脈外文脈構造は3次のレベルに位置づけられ, それぞれ後者が前者を止揚していくという関係にある。この広義の文アクセントに共通する「内容」を6で挙げた伝達価値, あるいは「重要性」などに求めうるか否かは本稿の枠組を越える問題である。

(注)

- 1) プラハ学派の「機能的文分析」の考えによるところが多い。
- 2) 各定義の提案者や, 各定義間の異同については Weigand (1979) などに詳しいので本稿では省略する。
- 3) これは, 各区切りにイントネーションが現われるからであり, 聴覚的には音の高低が強弱よりもアクセントの知覚においてより重要な役割を果していると考えられる。しかし, 最も主要な文アクセントについては, アクセント付与が行なわれた後に, その場所に文の叙法を表わすイントネーションが現われるのであるから, 単独に切り離して考察することができる。この間の事情については Löttscher (1981) を参照。
- 4) インフォーマントとして東京外国語大学の H. Steinberg 先生, I. Albrecht 先生, 静岡大学の H. Wels 先生に労を煩した。ここに感謝いたします。
- 5) 通常アクセントと対照・強調アクセントは異った言語レベルに属する現象と考える。つまり, 対照・強調構造を除いてみて現われるアクセントが通常アクセントである。Der Geizige hat kéinen, der Verschwender hat einen únnützigén Genuß von dem Seinigen. においてどちらか一方の文だけを取り出せば, アクセントは Seinigen に置かれることになる。
- 6) 幸田 (1980) において, これらの語が対照・強調構造を含意することを指摘した。
- 7) このうち理由を表わす文については, その中の主語が後文の主語とはなり得ない。*Die Hélena ist krank. Sie kommt nicht. (ヘレナが病気です。彼女は来ません。)
- 8) このような研究は, 数が少ない。永野 (1973) は, 日本語の「が」を主語とする文を現象文, 「は」を主語とする文を判断文としてこれらの現われる文脈を特徴づけている。前者のみが現われる文章は観察記録や情景描写に多く, 後者が中心となる文は説明文などに多いという。

参 考 文 献

- Allerton, D. J. (1978): The notion of givenness; in: *Lingua* 44, S.133-168.
- Allerton, D. J. (1979): Three reasons for accenting a definite subject; in: *Journal of Linguistics* 20, S.49-53.
- Bartsch, R. (1972): *Adverbialsemantik*; Frankfurt am Main.
- Beneš, E. (1962): Die Verbstellung im Deutschen von der Mitteilungsperspektive her betrachtet; in: *Philologia Pragensia* 5, S.6-19.
- Bierwisch, M. (1966): Regeln für die Intonation deutscher Sätze; in: *studia grammatica IV*, S.99-201.
- Chafe, A. (1976): Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects and topics; in Li 1976, S.25-55.
- Clément, Danièle/Wolf Thümmel (1975): *Grundzüge einer Syntax der deutschen Standardsprache*; Frankfurt am Main.
- Dressler, W. (1970): Modelle und Methoden der Textsyntax; in: *Folia Linguistica* 4 (1970), S.64-75.
- Dressler, W. (1973): *Einführung in die Textlinguistik*; Tübingen.
- Essen, O. v. (1965): *Grundzüge der hochdeutschen Satzintonation*; Ratingen/Düsseldorf.
- Fuchs, A. (1976): ‚Normaler‘ und ‚kontrastiver‘ Akzent; in: *Lingua* 38, S.293-312.
- Grewendorf, G. (1980): Funktionale Satzperspektive und deutsche Wortstellung; in: *Linguistische Berichte* 66 (1980), S.28-40.
- Grundzüge einer deutschen Grammatik* (1981): hg. v. E. K. Heidolph, W. Flämig, W. Motsch; Berlin.
- Haftka, B. (1981): Reihenfolgebeziehungen im Satz; in: *Grundzüge einer deutschen Grammatik*, S.702-764.
- Harweg, R. (1971): Die textologische Rolle der Betonung; in: *Beiträge zur Textlinguistik* (hg. v. W. D. Stempel, München, 1971), S.123-160.
- Heidolph, K. E. (1966): Kontextbeziehungen zwischen Sätzen in einer generativen Grammatik; in: *Vorschläge für eine strukturelle Grammatik des Deutschen* (hg. v. H. Steger, Darmstadt, 1970), S.78-85.
- Jung, W. (1968): *Grammatik der deutschen Sprache*; Leipzig.
- Koda, K. (1976): *Regularitäten des deutschen Satzakkzents (=Magisterarbeit, Fremdsprachenhochschule Tokio)*
- 幸田 薫 (1980): Gradpartikeln の記述に向けて; *ドイツ語教育部会報 (日本独文学会)* 17, S.11-15.
- 久野 暲 (1978): *談話の文法*; 東京。
- Lenerz, J. (1977): *Zur Abfolge nominaler Satzglieder im Deutschen*; Tübingen.
- Lötscher, A. (1981): Satzakkzent und Tonhöhe; in: *Linguistische Ber-*

- ichte 74 (1981), S.20-34.
- Li, C.N. (Hg.) (1976): Subject and Topic; New York/San Francisco.
- 永野 賢 (1973): 文章論詳説; 東京.
- Stötzer, U. (1973): Deutsche Phonetik 2; Leipzig.
- Trojan, F. (1961): Deutsche Satzbetonung; Wien.
- Weigand, E. (1979): Zur Zusammenfassung von Thema/Rhema und
Subjekt/Prädikat; in: Zeitschrift für germanistische Linguistik 7.2
(1979), S.167-189.